

結び

ふりかえり 近代文学を読む意味

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。今回はいわゆる「ふりかえり」というものをします。前学期（本書第一部）も含めてふりかえりたいので、例によってくり返しが多くなりますが、最後と思ってお付き合いください。

近代文学の終り？

近代から近代後期、ポスト近代、現代へと進むにつれ、「自国の社会が近代化するさまを描く」という近代文学の使命にはいくつかの限界が見えてきました。

一つには、二十世紀後半になると、先発国でも後発国でも、近代化がある程度進み、社会発展が次の段階に入る国が増えてきたという状況が挙げられます。そうした国々では、近代化の諸問題について考え、議論する必要性が以前よりも弱まります。たしかに、自由や平等などの理念の実現は不十分な場合が多く、それに関する取組や闘争は続いています。ただそれでも、「近代化に一定のめどがついた」と人々が感じ始めた社会では、「わが国で近代化は可能か、別の道はないのか」などの問いを描いていた近代文学が少しずつ縁遠くなっているでしょう。それは現代のロシア人がトルストイを読み、日本人が漱石を読み、中国人が魯迅を読むときに感じているものです。現代の読者には近代化とは別の問題がアクチュアルになっているのです。

第二に、グローバリゼーションが挙げられます。「自国の社会の近代化を描く」という使命から明らかなように、近代文学とは本質的に国民文学です。つまり、「自分の国」が基本的な枠組になっています。たしかに外国との交流（旅行や戦争）はしばしば用いられるモチーフですが、それでも作品の主たる舞台は自国であるのが普通です。

しかしグローバリゼーションの進行によって、文学における「自分の国」という枠組はかつての重要性を失いました。それを如実に示すのが、移民文学の世界的隆盛です。移民が使用言語を取り替え、移民先の社会を描くときに現れる「自分の国／他人の国」の揺らぎは、近代文学がほとんど扱わなかった主題です。移民文学が捉えたその揺らぎこそ、グローバル化が進む現代社会を描くのに不可欠な主題だと言えるでしょう。近代文学がナショナルな文学だとすれば、現代文学はグローバルな文学です。

映像文化の発展も重要です。二十世紀以降、もっとも発展した芸術・情報メディアは映像（写真、映画、テレビ、動画等）です。長編小説が近代文学の中心的ジャンルになった理由の一つに「平易さ」が挙げられます。分かりやすい散文で書かれ、入手しやすいメディア（雑誌・書籍）に発表されることで、長編小説は多くの読者を得ました。しかし、映像の平易さは桁違いです。文章を読むのが苦手な人にも親しみやすく、映画館に行ったりテレビをつけたりネットにつながるだけでアクセスできます。また主題的にも、長編小説が必ずしも成功しなかった第二次世界大戦という重要な主題で、独自の発展を遂げました。二十一世紀の今日、文学と映像の競争の結果は明らかと言わざるを得ないでしょう。

このようにして、近代文学とその中心的ジャンルの長編小説は、二十世紀後半、芸術と社会における特権的地位を失いました。この授業ではロシア文学を例にその図示を試みました。他国の文学でも同じような趨勢が示せるだろうと考えています。

近代文学の効用

こういう、ある意味で悲観的な結論になると、皆さんは反問されるかもしれません。「もしそうなら、私たちはいったい何のために近代文学（自国の文学はまだしも、外国文学まで）を読むのか？ 読んで何の得があるのか？」——これ

は大切な問いです。

「得」というと露骨ですが、実際、何らかの効用やモチベーションがなければ、読書をするのは難しい。私たちの人生には、他にも楽しいこと、しなければいけないことがたくさんあります。

私はよく学生にこう話します。「一日20分は読書しよう。一日20分本を読めば、三日で1時間、かりに一年で60日さぼったとしても100時間読める。十年で1000時間になる。十年で1000時間読書した人と、100時間しかしなかった人では歴然とした差が出るよ」と。しかし、しばらくして聞いてみると「できません」という答え。「どうして?」「忙しくて」「……」。どんなに忙しくても一日に20分の時間が作れないとは思えません。でも、結局、モチベーションがないと読書はできないのです。文学のように実用性に乏しい読書はなおさらです。

文学の効用について、「文学作品を読むと昔の人々の暮しや文化が分かる」という説があります。実際、ツルゲーネフやトルストイを読むと、ロシアの地主貴族の暮しぶりが思い描かれます。また、岡本綺堂の『半七捕物帳』を読めば、西欧的近代が少しずつ入ってきていた江戸末期のようすが彷彿とします。しかし、昔のことを知りたければ歴史書を読めばよいとも言えるでしょう。

「文学を読むと想像力が養われる」と説く人もいます。たしかにそうです。言葉だけをたどって、人間の心理や性格、都会の暮しや自然の美しさを思い描くにはかなりの想像力を要します。文学作品を読むことはそうした言語的想像力を養うよい訓練になるでしょう。

しかし率直なところ、映像文化がこれだけ発展した今日、言語的想像力はどれくらい必要なのでしょう。言語描写をたどってディテールを思い浮かべる能力と、映像が提供するディテールを鑑賞する能力を天秤にかけたとき、どちらがより重要かは意外と難しい問題でしょう。後者を選ぶ人々が増えているのが現代の傾向であり、それを嘆くだけでもしかたないように思います。

この点で特徴的なのがファンタジー文学です。トールキンの『指輪物語』を読んで、そこに描かれている想像上の種族や動物、自然や国々を思い浮かべるのは意外と難しい。ファンタジー文学を愛読する人はそれなりに限定されているでしょう。その種の言語的想像力が豊かな人、ないし鍛えられた人でないと『指輪物語』や『ナルニア国物語』はなかなか読み通せないものです。しかし、

それらの映画版は言語的想像力がなくとも楽しめます。CG技術の発展のおかげで巨人や竜が向こうから迫って来てくれるのです。映画の発展によってもっとも割を食ったのがアリズム小説だとすれば、もっとも得をしたのがファンタジー小説だと言えるかもしれません。

なぜ、五十年前、百年前、二百年前に書かれた小説を読むべきなのか。読むとどんな得があるのか。この授業から導かれる一つの答えはこうです——「近代について考え直すことができる」。近代というプロジェクトが終わったかどうか議論が分かるとしても、百五十年ほどの猛スピードの近代化を経て今の日本があることは事実です。現代を生きる私たちの内にも「近代化の残滓」が潜んでいるのではないのでしょうか。それも後発国特有の近代化の残滓が。

『三四郎』第一章で、広田先生がどうも西洋人は美しい、それに引き換え、われわれは憐れだなあと三四郎に言うとき、広田先生はアイロニーの話法で話しています。それでも、彼の言葉には西洋人（白人）に対する近代日本人の典型的な心情が示されています。こうした心情は私たちのなかで根絶されたでしょうか。

『罪と罰』のラスコーリニコフは、ペテルブルグのネヴァ川を眺めていて、帝国の近代化のために造られたこの都をはかない幻影と感じます。ロシアの近代化の「根なし草」性を嘆くロシア人は今日でもいます。彼らの嘆きは私たち日本人にとって理解不能でしょうか。

広田先生やラスコーリニコフの感慨がまったく分からないという人は、もしかしたら、もう近代文学を読む必要はないのかもしれませんが。少なくとも近代文学本来の役割において読む必要はないでしょう。

逆に、もし広田先生やラスコーリニコフの感慨に何か感じるものがあるなら、それはあなたにも「近代化の残滓」が——しつこいようですが後発国の近代化の残滓が——残っているということです。その残滓はどれくらいの量でしょうか。小説を読むと自分自身のことが分かる、と言えるのであれば、一つにはこうした意味においてでないかと思われます。

こういうお話をすると、皆さんはある程度納得してくださる一方、「それだけ？」とお感じにもなるのではないのでしょうか。近代とは何か、自国と自分自身

にとっての近代化の意味について考えるヒントになる。それも悪くはない、でもそれだけ？ と。

はい、私も声を大にして言いたい。それだけではない！ と。得や効用も大切ですが、作品そのものの面白さ — それより強い読書のモチベーションはありません。だから、この授業では、今の日本でも面白いと思ってもらえそうな作品を選びました。そのため、文学史的には偏ったところが出てしまいましたが、ロシア小説の面白さと幅広さが皆さんに伝わることを期待しています。

(終り)